

# 東京オリンピック・パラリンピックの意義

真田 久

日時：2020年5月21日（木）午前9時

会場：（オンライン講演）

〔講演〕

創価大学の皆様、こんにちは。筑波大学の真田久と申します。本日は創価大学の皆様にオリンピック・パラリンピックの意義というテーマで話をさせていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

## 1. オリンピックとの出会い

最初に私の自己紹介をしたいと思います。東京都大田区に生まれました。その後、筑波大学に進み、研究者になり、オリンピックの人類学、オリンピックの歴史あるいは教育的な価値についての社会での実践などについて、関心を持って研究をしております。その関係で、昨年のNHK大河ドラマ「いだてん」のスポーツの歴史に関わる考証なども行いました。現在は筑波大学の教授をしています。また大会の組織委員会では参与として文化教育委員会の委員などを務めております。国際オリンピック委員会（IOC）の研究センター委員にもなっておりまして、オリンピックの研究について、世界の人々と連

(2)

携をして進めています。また日本スポーツ人類学会の会長も務めさせていただいております。

私がなぜオリンピックに興味を持ったのかということですが、最初にオリンピックに関わったのが1964年のことでした。小学校3年生でした。国分寺市に住んでおまして、小学校の朝礼で毎回校長先生が話をされたことがきっかけかもしれません。「間もなく、オリンピックが東京で行われて、たくさん外国人が東京にやってくる。もしかしたら我が小学校にも来るかもしれません。そのときに、グラウンドがゴミで散らかっていたら、みっともないのでグラウンドを綺麗にしましょう。また、東京の街を綺麗にするために登下校でゴミを拾いましょう」と。これを毎週話されていました。私は当時、オリンピックがスポーツの祭典だとは知らず、でも、ともかくたくさん外国人が来るイベントらしいということが分かったので、友達と一緒に下校するときにごみを拾った、そういう記憶があります。

しばらくして大学生になった頃、大学の図書館の書庫で、1964年首都美化運動というのがあって、月に1回東京の街を綺麗にしようという、そのような運動がオリンピックの学習活動として行われたということを発見しました。そのときのスライドが、この右側の右上のスライドであります。さらには聖火リレーをこのとき見に行きました。当時の聖火リレーは、今と違いまして、白煙がモクモクと出るんですね。白バイが先導して、その後、聖火ランナーと伴走車が瞬く間に走り去っていった記憶があります。聖火ランナーは非常に素晴らしいなどそんなふうに思った記憶があります。これが私のオリンピックの思い出でありまして、このことがきっかけで、今、皆さんの前でオリンピック・パラリンピックの意義について話をするということに繋がっているのかもしれません。

ロードマップを紹介します。まず、東京2020大会の延期が決まりました。そのことについて確認をしたいと思います。2点目に、そもそもオリンピックはどういうことをきっかけとして始められたのかということをお遡ってみたい。3点目に、オリンピック・パラリンピックの価値、意義として、そ

ここにありますが難民選手団、国を超えた友情、パラリンピック、特にそこで謳われる多様性も含めて、パラリンピックの価値、さらに東京 2020 大会の形について、皆さんと考えたいと思います。

## 2. 東京 2020 大会の延期について

最初は、東京 2020 大会の延期についてです。2020 年が明けまして、箱根駅伝が行われ、創価大学は大健闘をしましたね。まさかあのときに、東京オリンピック・パラリンピックが延期になるということは誰も予想しなかったことと思います。ところが、新型コロナウイルスの感染が、世界にどんどん拡大し、日本にも及び、その結果、徐々にオリンピック・パラリンピックの今年の開催が難しいのではないかという意見があちこちから出てきて、3月24日、日本側とIOC会長が話し合い、延期することが決まりました。その後、IOC理事会でもこれが正式決定となり、ほぼ1年延期して2021年の7月23日を開会式とすることになりました。新型コロナウイルスの世界的な蔓延を克服し、完全な形で開催をしたい。この「完全な形」というところが非常に大きな点になります。

そもそもこの東京 2020 大会のビジョンは、スポーツには世界と未来を変える力がある、という非常に大きなビジョンです。具体的に、スポーツにはそれほどの力があることを示そうということです。まさに、このビジョンを示す格好の場が2021年のオリンピック・パラリンピックにもなると言えます。そのもとで基本コンセプトが3つ挙げられています。1つが、「全員が自己ベスト」を目指そう。これは、アスリートはもちろんですが、大会の運営、さらには外国からのアスリートや観客を迎えるボランティアたちも最高のおもてなしをしよう、ということです。2点目は、「多様性と調和」。これはキーになるコンセプトでして、パラリンピックをはじめとして、様々な障害あるいは差異というものをお互いに理解し合い、そして平和な社会あるいは共生社会、お互いがお互いを認め合う社会ということを目指して進んで

(4)

いこうということです。3点目の「未来への継承」は、そういうことを次の世代にもきちんと受け継いでいこうということです。これが大会のビジョンということになります。

そのことに関連して、今年になって大会のモットーが発表されています。それが“United by Emotion”という言葉です。この大会は感動をもとにして1つになろうという、そういう大会にしたいということです。まさに、このプロモーションビデオも作られており、このオリンピックスタジアムにいるんな国の人々、いろんな人々が集まってきて、感動を共有しようということが謳われています。これも大会組織委員会のホームページに載っていますので、後で見てくださいと思います。

そうした矢先に大会の延期が決まりました。延期されたことで、課題をいろいろ考えてみました。まずはアスリート、観客、ボランティア、あるいは役員等の健康と安全の確保ということです。コロナウイルスに感染しないような様々な配慮がなされなければいけません。また、会場を2021年も引き続き確保しなければいけない。中にはずっと継続して確保しておかなければいけないというものもあります。各自自治体では、ホストタウンの交流活動がずっと展開がされています。500近い自治体で、各国の選手が各国の人々と文化、教育、アスリートの事前キャンプ等の交流活動が行われていました。それが今年こういう形になり、オンラインでの交流活動になったり、延期になったりしているわけですが、明年も引き続き交流活動が行われるように考えていかなければなりません。さらに、2021年の5月にワールドマスターズゲームズが行われる予定です。これが開催されるかどうかも考えていかなければいけないんですが、それが開催された場合に、オリンピック・パラリンピックとのより深い連携が求められます。具体的には交通移送システムを初めとするコロナウイルスの感染防御のための連携です。

またスポンサーには、このオリンピック・パラリンピックのことを踏まえさまざまな権利が保障されているわけですが、それをきちんと2021年も使えるようにすることが必要になります。オリンピック村、選手村も、大会

終了後にはマンションになる予定だったのですが、すでに契約も始まっていますので、そういった様々な課題が出てきます。それらを含めてかかる経費というのが、おそらく3000億円ぐらいになると試算されています。IOCはすでに800億円を用意するといっていますが、その残りはどうなるのか。コロナウイルスに対する様々な経費がかかっている中で、オリンピックの延期のためにさらなる経費がかかる。これをどうするのかという大きな課題があります。それにつけても、聖火は日本に到着をしまして、復興の火として東北3県を回った後、現在これは種火になって保管をされているという状況です。この聖火を来年リレーで各県を渡していき、そして暗闇からはるか先に見える希望の灯にしようというのが聖火の大きな役割になっていくのだらうと思います。

IOCのトーマス・バッハ会長は、Olympism and Corona というメッセージを、4月の下旬に発表しました。これまで例のない大会の延期、近代オリンピック史上初めてのことになりました。連帯、創造性、決意、そして柔軟性、柔軟な対応が必要であるということを述べています。安全な環境、コストの削減も考えて、さらにはWHOとの連携を考えた上で、東京2020大会を人類統合の祭典にしたいと、聖火を「人類の暗闇を照らす希望の光にしたい」と述べています。まさにIOC会長としての決意が込められた内容と思います。この未曾有の危機を乗り越えて、ポストコロナの世界にはスポーツが必要であることを、オリンピックの価値を通して作っていかうではないかということです。これは国が示しているウェブサイトに載っていますので、興味のある人は是非読んでいただいて、さらに意見を募集もしています。私の方にも、IOCから、日本の若者の意見やコメントを知らせてほしいということですので、是非ともコメントや意見、感想等を送りたいという人は私宛に英語で書いて送ってください。

### 3. オリンピックの起源

(6)

次に、オリンピックの起源について話を進めたいと思います。近代オリンピックは、そもそも古代のオリンピックの復興として始まりましたので、その古代のオリンピックがどのようにして始まったのか、というところからお話ししていきます。

当時の古い文献によると、ギリシャの国々は戦争（内戦も含めて）と疫病で苦しんでいたとあります。それを終息させるために、デルフォイという聖地に神託、神の意志を確認に行きます。すると、「戦争をやめてオリンピアで競技祭を行いなさい」というお告げがあった。そこでオリンピアで競走の競技を行いました。短距離走を200m ぐらいの距離を走って優勝者を決めるという競技が行われ、エリスという都市国家出身のコロイボスというアスリートが優勝しました。これが第1回のオリンピアードで、紀元前776年のことでした。つまり、オリンピックのそもそもの発祥は、戦争と疫病の終息から始まっていたのです。歴史はまさに、今日までそれが引き継がれているということになります。

このオリンピックは4年に1度行われるようになりました。やがてギリシャの人々がここにゼウス像を作ります。高さ10数メートルあるゼウス像で、古代の人々にとって世界の7不思議の1つに数えられたものです。聖域のすぐ横にこのオリンピアの競技場があります。ここで古代オリンピックが行われたわけです。紀元前776年から紀元後393年まで行われていたことが分かっています。この間、戦争で中止されることはありませんでした。これはゼウスの神を祭った祭典でもあったので、戦争によって血を流すことはできないということで、オリンピックが行われている間は、前後含めて3ヶ月間、戦争をしてはいけない、武器を取ってはいけないと、そういう決まりになっていました。これは、考えてみれば、古代オリンピックはゼウスを祀る巡礼ではなかったか。こういう解釈もできると思います。古代の7不思議の1つでもありましたから、一生に一度はこのゼウス像を見に行きたい、拝みたいということで、歩いてオリンピアまで人々が集まってくるわけです。どうせなら、祭典が行われるときに集まろうということで、4年に1回の祭典は多く

の人で賑わうようになりました。

行われた種目は、競走。これは短距離走、中距離走、長距離走がありました。また、レスリングやボクシングといった格闘技や、やり投げ、円盤投げなどの投てき、幅跳びなどの跳躍もありました。さらには、馬の競技、これは競馬と戦車競走といって、馬車を4頭の馬が引く、そういう戦車競走が行われました。さらに、音楽の競技もありました。これは、笛を吹いてその笛の音が遠くまで綺麗に響く、さらに人間の声、これも遠くまで綺麗に届く、こういう競技も行われています。これが約1200年間、今日の近代オリンピックの10倍くらいの長さで行われていたのです。宗教的な意味合いを持っていたがために、これだけ長く行われたとも考えられています。

では古代に行われていた競走の競技がどのようなものであったのかを紹介したいと思います。これはネメアという場所で、ここでも古代では競技が行われていたのですが、それを復活した競技として、今日も4年に1回行われています。

実は私も2016年のネメアの競技祭に出場いたしました。そのときのレースを紹介したいと思います。12人が1つの組で走ります。黒い服を着ている人が審判です。黄色い人も係員でスタート装置を準備します。選手たちの前に2本のロープが置かれます。真ん中の審判がロープを引くとポールが前に倒れます。そうすると、ロープが落ちてスタートできます。今の競馬のようなスタートです。不正なスタートさせないために作られた装置で、当時からフェアプレーという考えがあったということです。

同年代で走ったのですが、2016年、私は60歳で、12人中3位という成績でした。優勝者にはシュロの枝が渡されます。ギリシャの人が私に握手してくれました。古代の聖火がありまして、ずっと火を絶やしてはならないという聖火です。この組で優勝した人は、はちまきを巻いてもらい、シュロの枝を手を持つことで、自分は勝ったということを他の人に示せるのです。これが古代の競走です。ちなみにこのネメア競技祭、4年ごとにやってまして、今年2020年の競技祭は残念ながら来年2021年に延期になりました。これは

(8)

誰でも参加できます。インターネットで、Nemean Games で検索すれば出てきますので、無料で誰でも参加登録できます。ただこの場所に行かなければいけない。現地集合、現地解散です。ぜひ参加してみたいという人には、来年の参加をお勧めしたいと思います。

先ほど、音楽も競技として行われていたと話しましたが、芸術あるいは教育が、この古代オリンピックには結びついていました。単なる身体だけの競技ではないということなんです。特徴として裸で競技を行うという慣わしで、ギムナシオンという競技の練習場では裸で練習を行い、傍らでフルートを吹いている人もいました。歌の競技もありました。いかにうまく音色を綺麗に出すかということ競う競技でした。古代のオリンピックでは、この競技に勝った人は名前が刻まれて優勝者リストに入っています。こうした裸のアスリートが競技を行うのを芸術家たちが放っておくわけがありません。芸術家たちも集まってきて、彼らの美しい、鍛え上げられた青年の像を作っていきます。その中で有名なものがミュロンという人が作った円盤投げアスリート像です。さらには、ポリュクレイトスが作ったやり投げのアスリート像、こうしたものが作られていき、これらは理想的な身体美を示している。八頭身で鍛え上げられた肉体と、しかしその一方で、粗暴さはない、品格が漂っている、内面的な美しさも合わせ持っているということで称えられた、そういう像でもあります。

このような古代オリンピックというものから東京 2020 大会を考えていくと、戦争と疫病からの解放という意義は今日にも受け継がれていくべきものだと思います。また、文化・芸術とともに昇華されて発展をしていったということがわかります。紀元前 776 年から 4 年を 1 オリンピアードとして進んでいきます。ということは、4 年間は、開催都市は責任を持たなければいけないということかと思います。その 4 年がいつかといいますと、今年の 1 月から始まっていて、2023 年の年末までということになるわけです。

さて、ここでちょっと問題を出したいと思います。紀元前 776 年からの 4 年が第 1 オリンピアードでした。そこから数えると、2021 年は第何オリ

ピアードに当たるでしょうか。ちょうどいい数字なのです。数学の得意な人はさっと計算して分かるかと思いますが、これは第700オリンピックアードなんです。ちょうど2021年度は第700オリンピックアードの第1年目に当たります。それぞれのオリンピックアードの第1年目にオリンピックで競技祭を行うという決まりでしたので、2021年にオリンピックが行われるということは、古代オリンピックの原点に戻ると、ちょうど第700回という、まさに転換点に当たることを示していると思います。

#### 4. オリンピック・パラリンピックの価値

次に、オリンピック・パラリンピックの価値という話をしたいと思います。ここでちょっと、聖火リレーについてのWebサイトを紹介したいと思います。実は私この1月に、女優の石原さとみさんと聖火の歴史について対談をいたしました。その様子がこのサイトに載っています。石原さとみさんは創価高校のご出身でもありますね。非常に聖火について関心が深く、聖火リレーのアンバサダーとしても活躍されている方でもあります。是非とも見ていただきたいと思います。

コロナウイルス、これは人々を分断しているといえます。国と国はもちろんですが、ソーシャルディスタンス、あるいはフィジカルディスタンスをとって、人と人との間も距離を保たなければいけない。県と県をまたぐこともあまり好ましくないとされていて、さらには国際線の飛行機は今ほとんど飛んでいないということで、まさに人々、国と国を分断していると言っていいかと思います。それに対して、このオリンピック・パラリンピックというのは、連帯、人と人とを繋ぐ、国と国とを繋いでいくという価値があると思います。その中で、大会そのものは、アスリートの素晴らしいパフォーマンスが披露されますので、卓越を示し、さらにパラリンピックを通して多様性というものを示していくものです。これが大まかに言ってオリンピック・パラリンピックの価値であると思います。

ここで特筆すべきは、国を失った人々に対して、オリンピック・パラリンピックが開かれているということです。難民選手団です。前大会リオデジャネイロのオリンピック・パラリンピックでは、10人の選手が難民の選手でした。エチオピア、南スーダン、シリア、コンゴ民主共和国出身でそれぞれの国を追われ、そしてどこか別のところに退避をしているアスリートです。もちろんレベルは国際レベルの力を持っているのですけれども、その彼らが難民選手団として初めてこの2016年に参加しました。なぜこの選手団が参加したのか。これは、まさに自他共の幸福という創価教育学を作られた牧口常三郎先生の考えと共通するものだろうと思うわけです。難民は現在6500万人以上いると言われていています。そうした、母国を失って、母国を離れている人々に対して、スポーツは希望を与える、また真摯な健康も与え、そしてコミュニティの架け橋となるだろうと。国ではなくてもいろんなコミュニティがあります。そのコミュニティ同士を繋いでいく。まさにオリンピックムーブメントと難民たちという、こうした人々を繋いでいく、それによってお互いが幸福になっていくということです。まさに、自他共の幸福です。国連難民高等弁務官を務めた緒方貞子さんはこう述べています。「文化、宗教、信念が異なろうと、大切なのは苦しむ人々の命を救うこと。自分の国だけの平和はありえない。世界は繋がっている」と。まさにスポーツを通して難民もアスリートも繋がっているということを示すために、難民選手団が結成されたのです。

シリア出身のマルディニさんという競泳100mのアスリートは、シリアからギリシャに船に乗って脱出をいたしました。その途中で、エンジントラブルで船が止まってしまいます。どうしたかといいますと、お姉さんも競泳選手なので、2人で海に飛び込み、その船を押ししたのです。彼女たちの泳力で船を押し、そしてギリシャまで辿り着いたと、そういうアスリートです。

エチオピア出身のギンドさんはマラソンに出場した選手ですが、東京2020大会も目指しています。彼はもしも東京2020オリンピックに出場できたならば、かつてエチオピアから出たマラソンランナー、アベベ・ビキラ選手に

ならない、最後は裸足で走ってゴールしたいと述べています。アベベ・ビキラ選手は東京大会の前のローマ大会で、裸足で走って優勝し、東京オリンピックでも優勝して二連覇を成し遂げたマラソンランナーです。その偉大な先輩に繋がりたいという思いを述べています。こういう選手が難民選手団として出場する可能性があるわけです。

IOCはこの難民選手団の概要を発表しています。今度は37選手を8競技に出場させたいとのこと。前回は、3競技に30選手でした。それを増やしたいということですね。国もいろんな国になっています。現在、難民を受け入れている国から、こういう選手を出したいということで、オーストラリア、ベルギー、ブラジル、ドイツ、イスラエル、ヨルダン、ケニア、ルクセンブルク、ポルトガル、オランダ、トルコ、そしてイギリスが申し出ています。残念ながら日本は入っていません。その概要は、この6月に発表したいということです。これがどうなるか、このコロナウイルスによる大会そのものの延期によって、これも延期される可能性があります。しかし、東京2020大会でも難民選手団が参加し、世界の連帯と平和を呼びかけることの意義は大きいのです。

次に、国を超えた友情アスリート。個人個人の友情という面を見ていきたいと思います。まず、北京で行われたオリンピック。2008年8月8日に開会式が行われました。その時、大きな事件が起きます。ロシアとジョージアが、あろうことか、この開会式のときに戦争状態になってしまったのです。そのすぐ後に射撃の競技が行われました。女子のエアピストルの種目で、ロシアのパデリナ選手が銀メダルを獲得。ジョージアのサルクワゼ選手が銅メダルを獲得します。この2人が表彰台に並んだわけです。その後メディアはこぞって質問をします。母国同士がそれぞれ戦争になってしまった、それについてどう思いますかと聞いたわけです。そうすると、このように答えました。「2人の友情には何も立ち入ることはできない」、「スポーツは政治を超えることを証明したい」と。これが、スポーツはまさに政治を超えるということで、全世界に発信されました。

次に、これは思い出にまだ残っている方も多いと思いますが、リオデジャネイロ大会での出来事です。陸上女子5000メートルでした。予選でニュージーランドのハン布林選手とアメリカのダゴスティノ選手が接触して2人とも転倒してしまいます。まず、このダゴスティノ選手がハン布林選手を助ける。助けた後、今度はダゴスティノ選手が走れなくなってしまったんです。それを今度はニュージーランドのハン布林選手が助けて、何とか助け起こし、そしてそれぞれがゴールに向かう。ゴールでは先にゴールしたハン布林選手が、ダゴスティノ選手を抱きかかえるようにして迎えました。国を超えて2人の友情というものが見事に示されたシーンでした。

また、平昌2018年冬季オリンピックでもこうした光景がありました。これも皆さん、記憶に新しいことだと思います。日本の小平奈緒選手と韓国の李相花(イ・サンファ)選手です。スピードスケート500m女子決勝です。そこで小平奈緒選手が優勝をして金メダルを獲得。韓国の李相花選手、それまで2連覇を成し遂げていて、3連覇を目指していたんです。しかしタイムがわずかに及ばず、銀メダルになりました。そこでちょっと残念な姿を見せて競技場を、国旗を持って滑っていたんですが、そこに小平奈緒選手が寄ってきて「素晴らしい滑りだった」と、「私は今でもあなたを尊敬している」といって、抱き寄せて、抱きかかえて2人で競技場を周るという姿がありました。これが賞賛されたのは、この前の出来事から繋がっていて、実は小平奈緒選手が滑った後、素晴らしい記録、36秒台を出した。素晴らしい滑りを見せたわけです。そうすると、観客がどよめきます。素晴らしいということで、みんな総立ちになって拍手を送って歓声が沸き起こった。その後、小平選手が静かにするように口元に指を持っていったわけです。これは、この後、李相花選手が滑る、まず彼女に素晴らしい滑りをしてもらいたいということで、プレッシャーにならないように静かにするようにと観客に示したジェスチャーでした。この行為そのものが非常に素晴らしい、ということで韓国でも絶賛されたわけです。当時、日韓関係はあまり良くなかった状況で、それぞれの国で称賛された行為でした。

もっと前のことですが、東京オリンピック 1964 年の次に行われた 1968 年のメキシコシティのオリンピックでのことです。陸上男子 200m 走での出来事でした。アメリカのスミスが優勝をします。同じアメリカのカルロスが 3 位に入りました。それで、表彰台に上がると、この 2 人は黒い手袋で拳を高々と上げて、黒人差別に対する抗議のジェスチャーをしたんです。当時、68 年にキング牧師が暗殺され、黒人差別が相変わらずアメリカでは続いていました。黒人の子どもがレストランに入ろうとしたら、白人の店主から追い出され、棒で殴られるという痛ましい光景もありました。しかし、こうした黒人差別に対する抗議行動をしたことに対して、IOC はこの 2 人を処罰します。選手村を追放するのです。さらに、アメリカオリンピック委員会に圧力をかけて、「この選手を除名するように」と迫り、アメリカオリンピック委員会はこの 2 人を除名します。

さて、その時に 2 位だったオーストラリアのピーター・ノーマン選手はどういう態度をとったのでしょうか。彼は白人の選手です。2 人の黒人選手に賛同したのか、特に何も示さず保留だったのか、あるいは反対の意思表示をしたのか。その答えは、胸にバッジをつけて表彰台に立ったのです。そのバッジは、OLYMPIC PROJECT FOR HUMAN RIGHTS というバッジで、当時の黒人の選手たちが作った、人種差別に対して抗議する意味合いのバッジでした。ノーマン選手はこのバッジをつけて表彰台に上がっているのです。つまり、差別への抗議に賛同する意思表示です。

これによって、実は、彼もその後の選手生活に大きな影響を受けます。IOC によって好ましからざる行為という注意を受けます。彼は 200m 走でオーストラリア最初のメダルを取った優秀なアスリートです。しかし、実際オーストラリアからは表彰を受けない。次の 1972 年ミュンヘン・オリンピックを目指してトレーニングに励み、13 回標準記録を突破します。しかし、オーストラリアのオリンピック委員会は彼をミュンヘン・オリンピックの選手に選ばなかった。それで、200m の選手は誰もいないということになってしまいました。その彼は、その後はうつ病になったり、アルコール中毒になったり、

なかなか大変なこともあって、2006年この世を去ります。その後、2012年、オーストラリア連邦議会は、彼に対して謝罪を行います。「不当な差別を彼にしてみました」と。そこで、2018年になってオーストラリア・オリンピック委員会は、ようやく彼を表彰します。彼が逝去した時、彼の葬儀が行われました。その葬儀に、アメリカの2人の黒人選手がかけつけました。そして彼の棺を持つ役に自ら名乗り出て、彼の棺を持って葬儀の参列を果たしました。2人はノーマン選手のことを、68年の表彰時に、"I'll stand by you",つまり、「あなた方を支持する」と言ってバッジをつけてくれたんだと。自分たちは生涯忘れないということを述べて、棺を担ぐ役を担ったのです。これは、"SALUTE" (サリュート) という映画にもなっています。まさにこれも、国を越えた友情を示していると思うのです。

次に、パラリンピックについてです。ロンドンのパラリンピック2012年、100mに出場し、金メダルを取ったJ.ピーコック選手についてお話しします。彼が、スポーツにどんな影響を受けたのか、また、生きることの意味は何なのかという質問に何と答えていたか。まず、スポーツの影響については、「自分自身を受け入れることを可能にし、人々に自分は変わっていないということを理解させられた」と。そして、生きることの意味は「後悔しないこと、どの瞬間においても熱狂すること」というふうに、ピーコックさんは答えています。この言葉はストークマンデビル病院というパラリンピック発祥の病院に掲げられています。

また、ホイールチェア・ラグビー (車いすラグビー) のN.マグロイン選手。パラリンピックには出られなかったけれども、イギリスの代表になっています。スポーツの影響は「脊髄損傷で多くを失った。でもラグビーは私にあるものを返してくれた。それは熱中するということ」と。人生の中において、熱狂する、熱中する、これは非常に尊いということ、この2人のパラリンピックアスリートは述べています。生きることの意味は、「毎日好きなことをやること。不幸に出会った時、沈むか泳ぐかしかなく、私は泳ぐほうを選ぶ」というように、マグロインさんは答えています。パラリンピック選手の、非

常に深い思いがここにあると思います。こうしたものを、パラリンピックは見せてくれるわけです。

ここで、ある動画を紹介したいと思います。”We're the Superhumans”という動画で、イギリスのチャンネル4というテレビの制作会社が作った映像です。障害がある人でも何も変わりはない、むしろ優れている人もたくさんいるということがよくわかります。パラリンピックが楽しみになる動画ですので、ぜひ見ていただきたいと思います。

## 5. 東京 2020 大会の形

最後になりますが、東京 2020 大会の形についてです。第 32 回オリンピック競技大会が7月23日から8月8日まで、42会場で行われます。33競技という、オリンピック史上最も多い競技数になりました。新しい競技がそこに出ています。野球・ソフト、空手、サーフィン、スポーツクライミング、スケートボード。若者に人気のあるものもたくさん入っています。それから日本で馴染みの深いスポーツも入っています。パラリンピックは8月24日から9月5日にかけて、21会場で22競技が行われます。合わせて55競技が行われることになります。同時に、先ほど言いました第700オリンピックアードという大きな転換点、また、コロナウイルスの関係なども考えて、2020大会以降の形というものも踏まえていかなければならないと考えています。連帯、平和、これは復興の意味も込めての平和ですね。東日本大震災からの復興のみならず、社会的なコロナウイルスからの復興という意味も加わっていくと思います。そして、健康、多様性というものを踏まえつつ、やはり規模というものは縮小していく必要があるのだろうと思います。

また、現状の持ち回り開催というものも考えていく必要が出てきたのではないか。分散開催、これは既にIOCは徐々に進めつつあるのですが、今は基本的に1つの都市で開催していますが、それが非常に難しくなっているのです。都市を複数にしてもよい、あるいは国をまたいでもよい、という方向

になってきています。さらに、これまでもしばしば出てきた案なのですが、恒久施設を作ったらどうか、ギリシャにオリンピックを行う恒久施設を作ることで、4年ごとに多額な経済的支出や環境への影響も小さくすることができるのではないか。こういうことも考えていく必要があるかもしれません。同時にスポーツイベントの統合です。いろんな競技で世界選手権が行われ、そしてオリンピック・パラリンピックが行われています。その結果、年間のスケジュールが過密なくらい、国際的な競技会が行われている。それを統合することで、より柔軟な大会の開催が考えられるのではないか。さらにeスポーツ、あるいはリモート競技の模索、これもIOCでは既に考えられてきております。eスポーツについてもオリンピックやパラリンピックの理念に基づいたあり方というものと考えていく。さらにまた、リモート競技、これは分散開催にも繋がるかもしれませんが、遠隔でそれぞれ競技を行い、争うということは可能なわけですね。こうしたあり方というものと考えていくことになるだろうと思います。

さらに、重要なのは開催時期です。猛暑のこの夏の期間を避けるべきではないか、これをこの機会に考えていくべきだと思うのですが、こうしたことを、このコロナウイルスと700オリンピックアードをきっかけに大きく変えていくということが、この東京2020大会、なканずくその開催地の青年に課せられたミッションではないか、こう考えます。そして、そういう流れを踏まえつつも、明年2021年、東京オリンピック・パラリンピックを開催する形について考えてみていただきたいと思います。コロナパンデミックは終息すると信じていますが、ワクチンが開発されて、世界に行き渡るまではいかない、完全に危険性が拭い去れない可能性のほうが高いと思うのです。その場合、どのように大会を開催すべきなのか。アスリートあるいは観客の安全性を考え、観客はどのくらいの規模で入れたらいいのか、競技会場を分散できるとしたらどのようにしたらいいのか。リモートが可能なのか。はたまた、そこまでの安全性が確保できなかった場合、再延長すべきなのか。さらには中止という選択はどうなのか。こういうことをやはり私たちは考えなければ

ばいけないと思います。

そこで、若い、斬新な考えを持っている皆さん方に是非とも考えていただきたいと思っています。こちらは日本語で結構ですので、我こそはと思う人はこちらに送っていただきたいと思っています。その意見をまとめて組織委員会またIOCに直接繋げたいと思っています。

以上で私の講義を終わりにしたいと思いますが、最後に参考文献を紹介します。東京2020大会ホームページには、先ほど紹介したオリンピック・パラリンピックの理念やビジョンが示されていて、動画教材もたくさんありますので、見ていただきたいと思っています。また、日本オリンピック委員会も、様々な活動を行っています。さらには国際オリンピック委員会IOC、最近はオリンピックチャンネルというところが、動画等を通じて様々なメッセージを配信しています。こうしたものを見て、今日のオリンピックムーブメントの動きを見ていただきたい。同時にまた、パラリンピックのほうも見ていただきたいと思っています。文献はこちらにあるように、『オリンピック・パラリンピックを学ぶ』、岩波ジュニア文庫で今年出た本があります。また私の『嘉納治五郎』、これは日本のオリンピックムーブメントの歴史で、忘れてはならない人物、また自他共栄という牧口先生の自他共の幸福に相通じる考えを表明した教育者・国際人という視点で書いたものであります。これも、参考にさせていただければと思います。さらには、『オリンピック・パラリンピック残しておきたい物語』というのが、やはりこれも今年出ています。様々なアスリート達のストーリーが紹介されていますので、こうしたものも参考にさせていただければと思います。

以上で、私の講義を終わりたいと思います。ご静聴大変にありがとうございました。まだまだ大変な時期が続くかもしれませんが、これを乗り越えて、素晴らしい学生生活にさせていただきたいと思っています。

**【参考文献】**

東京 2020 大会ホームページ <https://tokyo2020.org/ja/>

日本オリンピック委員会 <https://www.joc.or.jp>

国際オリンピック委員会 <https://www.olympic.org>

後藤光将編 (2020) 『オリンピック・パラリンピックを学ぶ』 岩波ジュニア文庫

真田久 (2018) 『嘉納治五郎』 潮文庫

佐野慎輔・佐藤次郎・大野益弘 (2020) 『オリンピック・パラリンピック残しておきたい物語』 笹川スポーツ財団

**【講師紹介】**

真田久 (さなだ・ひさし)。筑波大学体育系教授。元体育専門学群長。専攻はスポーツ人類学、オリンピック史研究。筑波大学大学院修了。博士 (人間科学、早稲田大学)。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会参与。IOC オリンピック研究センター選考委員会委員。2019 年度 NHK 大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺～」スポーツ史考証担当。著書に『気概と行動の教育者 嘉納治五郎』(共著、筑波大学出版会、2011 年)、『19 世紀のオリンピア競技祭』(明和出版、2011 年)、『嘉納治五郎』(潮文庫、2018 年) などがある。